

あとがき

「BRAIN and NERVE」60 巻 6 号の特集は、Crow-深瀬症候群（POEMS 症候群）である。本症候群は私たちがさまざまな神経難病を研修している頃に報告されはじめた病気であり、ことさらその病気の成り行きに興味を持って読ませていただいた。当時は多発神経炎・浮腫・剛毛それに骨硬化性病変を示す、奇妙で予後の悪い疾患と理解されていたが、1984 年に中西孝雄先生が日本の症例 102 例をまとめて Crow-深瀬症候群という新たな疾患名で報告された。高月病とか PEP 症候群などさまざまに呼ばれていたのが、疾患名の付け方の難しさや不思議さを感じたことを覚えている。いずれにしろ、この分野の進歩は目覚ましいものがあり、主要な病態は VEGF の作用により説明されることが、有村公良先生の報告に詳しく記載されている。なかでも極めつけは治療の進歩であり、当初は予後不良の疾患として認識されていたが、現在では治療可能な疾患として考えられており、神経疾患治療が確実に進歩している 1 例として挙げられる。特にその方面の第一人者である桑原 聡先生が自己末梢血幹細胞移植の有効性を述べ、それに続く新たな疾患治療としてサリドマイド療法、抗 VEGF モノクローナル抗体療法、それにプロテアソーム阻害剤であるボルテゾミブ治療などが挙げられており、今後が期待される。

総説としては、神経有棘赤血球症の分子遺伝学的な研究の進歩を市場美緒先生がよく整理して述べており、また漆谷 真先生は難治性神経疾患の代表とされる ALS の病態仮説をレビューし、加えて彼らの研究である ALS 動物モデルへの免疫療法を紹介している。SOD1 Tg ALS マウスに変異 SOD1 蛋白にてワクチン療法を行うと、発症や罹病期間に有効性が認められている。

また、症例報告には期せずして 2 つの興味のある視覚異常を示した症例が示された。1 つは盲視と言われる blindsight (type2) を示した例で、視覚という認識のないところで視覚を認識している対応ができるという興味のあるものであり、もう 1 つは責任病巣と同側視野に変形視を認める症例報告であり、病態に興味を持たれる症例であった。いずれにしろ本誌はこれらの症例報告から CPC、また神経科学の最新の知見から高次機能に至るまで、多様な分野における情報が掲載されていて大変有用である。本誌を手にしてみて編集に携わる一人として喜ばしい限りである。

(糸山 泰人)

BRAIN and NERVE

(第 60 巻 第 6 号)

2008 年 6 月 1 日 (毎月 1 回 1 日発行)

定価 2,730 円 (本体 2,600 円 + 税 5 % (配送料実費))

(2008 年、年ぎめ予約購読料 34,860 円 (配送料弊社負担))

E-mail:bn@igaku-shoin.co.jp

Web <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/bn>

発行 株式会社 医学書院

代表者 金原 優

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

電話 本誌編集室直通 (03) 3817-5701

(高瀬・山内・山崎)

販売部直通 (03) 3817-5659・5660

ファクシミリ (03) 3815-7802

振替口座 00170-9-96693 番

印刷所 ㈱アイワード (011) 241-9341

広告申込所 ㈱丹水社 (03) 3561-1323

- Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo ©2008, Printed in Japan.
- 本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権 (送信可能化権を含む) は ㈱医学書院が保有します。
- JCLS < 日本著作権管理システム委託出版物 >
本誌の無断複写は著作権法上の例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に ㈱日本著作出版権管理システム (電話 03-3817-5670, FAX 03-3815-8199) の許諾を得てください。

編集顧問

生田 房 弘
臺 弘
大友 英 一
金澤 一郎
近藤 喜代太郎
酒田 英 夫
佐野 圭 司
島津 浩
杉田 秀 夫
高倉 公 朋
塚田 裕 三
中里 洋 一
彦坂 興 秀
平山 恵 造
藤澤 浩四郎
真柳 佳 昭
萬年 甫
水野 美 邦
柳澤 信 夫

編集委員

石塚 典 生
糸山 泰 人
岩田 誠
内山 真一郎
梶 龍 兒
川島 隆 太
河村 満 一
高坂 新一
作田 学
辻 省 次
寺本 明
中込 忠 好
中野 今 治
水澤 英 洋
(五十音順)